





写真1 小寺源吾邸の居間

写真2 昭和4年ごろの深江から芦屋にかけての海岸  
防波堤が切れ砂浜になり海水浴客もいる

(昭和5年『神戸高等商船学校機関科座学修了記念誌』から)

手を引かれながら君の住まいの松林に沿つて横の道を通つて家に帰り着いたものだ。二人だけの淋しい暮しだった」と回顧してしんみりと語つた。彼のその思いが私の胸に深く浸み入つた。楫西家は大阪西区新町の大手の問屋（何の商売か失念した）。このおばさんはお婆さんだった。この事情を當時私は既に薄々知つていた。この時より暫くして彼は癌で入院したので、これが彼との最後の会合となつた。彼はこの入院中も毎日必ず業務

報告を受け続けていた由、聞き及んでいた。

昔を偲べば、彼は非常に若々しく元気で頼もしい男だつた。我々の同期の集合があるといつも、「お前達の弔詞は俺が読んでやる」と自信たっぷりに云つていたのだがこんなに早く亡くなるとは予想もしなかつた。

次は小寺邸、小寺源吾氏は大日本紡績の社長だつた人。当時の大日本紡と云えば東洋紡と並んで他の紡績会社とは格段の相違の超一流の存在であつた。息子の大次郎君は御影師範附属小学校の級生だった。大次郎君は三井銀行に就職したが、弟は長くユニチカの社長を勤めた。住吉の觀音林に邸宅があり、遊びに行くとお母様の心を籠めたもてなしを受けた。深江の臨海に別荘を造られたのは、海水浴が主な目的であつた。芦屋の浜は小石が多く白砂の海岸とは言い難かつた。

最後に嘉門邸、海岸より少し離れて東西に伸びる静かな通りがあり、両側に立派な別荘が見られた。何れも大阪の実業家のものであつた。中でも道の南側に広い敷地の立派な別荘があり、嘉門さんと記憶する。どの様な方であつたのか知らなかつたが、ここに書き落とすことの出来な

い程の立派な別荘邸宅であった。

阪急電車神戸線の開通は昭和の初期であり、それ以後阪神間の山手に急激な開発が進み、別荘地として又住宅地として大発展したが、それ迄は阪

神電車沿線の芦屋の平田町、公光町、深江の神楽町だけがその対象となっていた。因に阪神電車は明治三十八年（一九〇五年）の開通である。

### 二十三、深江の水

本町にあつた本宅には勿論井戸はあつてポンプで汲み上げていたが、飲料、台所用には、一段深い層の湧き水を噴き出させ、これを掘り抜き井戸と云つたが通常「掘抜き」と簡略化して呼んだ。噴き出した水を横にある大きな矩形のコンクリートの水槽に引入れて貯水する仕組みになつていて。この湧き水は深い層からのものであるので金気があり、味には関係は無いが触れている物に次第に薄茶色が付く。擦れば直ぐ落ちる。阪神間のこの掘り抜き井戸による水は必ず金気を伴つていた。

この湧き水は六甲山系より芦屋の渓谷に流れ込み、再び地下に潜つて細かい砂利層で濾されて湧出してくる。清澄な水で銘



写真3 明治40年のごろの阪神電車青木駅  
(神戸新聞総合出版センター蔵の絵はがき)

酒灘の生一本の素地となる「宮水」の系統であるから硬水であるが、多分の炭酸分を含む鉱水であり、お蔭で天恵の「水の味」を味わっていた。花崗岩で構成されている六甲山より芦屋川に流れ込む水は花崗岩を構成している三種目の石英、長石、雲母が夫々崩壊して出来た砂利の層を通つて来たものであり、非常にきつい硬水であつた。例えば、洗濯したタオルなどパリパリに乾き上げられ、そのまま顔を拭くことが出来ず必ず一度揉み解いて使つていた。

宮水については深江など灘五郷は臨海の地であり、その海岸からの地下浸水が宮水に溶け込む。この海水は長期に亘つて構成された貝殻の積層を漉し通つて出て来る。従つて、カルシウム分を含有し、これ又、硬水である。上からと下からの強い硬水による井戸水が灘の銘酒の原料となる宮水である。これは京都大学の研究によるものと記憶する。

昭和十四年頃、住居は神楽町にあつた。松林に囲まれた所であつたが、その西側通路の出口に黒田さんの住居があつて、そこの井戸へ冬の酒醸造期には馬力によるタンク車が引つきりましに、その井戸水を運んでいた。主として西の方への運搬だった。東方面は直接西宮の宮水を汲んで運んだのだろう。何れにしても、この辺の井戸水は總て酒醸造の原料水となり得る硬水であつた。

昭和七年、学校を卒業して愈々就職が始まり、大阪勤めとなつた。この時飲む水は淀川水源によるものであり、その不味さに驚き入つた。流石に六甲の水はあると感銘した。当時水道に依る給水が原則となつていたが武庫川水源であり、上が

原（西宮の山手）に浄水場があった。神戸市は生田川水源であり、布引の滝が水源地であつた。そのあと人口増加に伴い、次第に淀川の水を引き入れる淀川水源に頼るようになった。

その後、昭和三十五年頃、勤めの関係で京都住まいが始まつた。その頃僧房などを訪れると、実に薰り高いお茶を出していただいた。私が五、六才の頃、祖父がお客様のある時、私を傍らに呼んで一緒に煎茶一服飲ませてくれた。その味を心得て、その後も玉露茶の質を充分吟味しながら茶を点てるのだが、この僧房の薰り高いお茶には及ばないとつくづく思った。矢張り加茂川の水のせいだろう。

秀吉が茶を点てるため、わざわざ宇治川の水を汲ましたという場所が宇治橋の欄干の出っ張りに「三ツ間」という名で遺されている。

水の性格には我々が常に掬すべきものがある。「水は方円の器に随う」とか「如水の交わり」とか我々常に心得るべき数々のものを示唆してくれる。殊に年が進んで来ると、如水交など全く魅力的な言葉である。別に話の穂を繋がなくとも、ただ会つておれば楽しいと云う様な交りは最高の交りと思う。友との交際も次第にかくありたいと思う。

ギリシャ神話ではヴィーナスは海水から生まれる（ボッティエリ Botticelli の名画で知っているだけだが）。ゲーテのファーストには「すべては水より生じたり。すべては水にて長らえん。」とある。誠に、水は生物の母である。

生物が海で発生し、水を含みながら陸へ上がって来たということは生物の含水量の多いことでも明白であり、これが現在の

定説のようだ。人間の生命も、水で成り立っている血液の上に浮かんでいる物質であると云い得るのではなかろうか。

然し、水それ自身は生命を生長せしめるものではない。これは生命の中に存在する独自の自我、自覚に依るものであり、各の努力を以て果し得るものであるということを承知せねばならない。お互いに頑張ろうではないかと云うことである。

#### 後書き

昔、深江村は阪神間で遜色のない村であった。何れの市町村も海辺の地から発展して行つたものだが、特に深江は田作りの出来る地域で、当時は他の地域（殊に芦屋は芦屋川により六甲山の花崗岩の流砂で覆われ、田畠は極めて少なかつた）に比して深江は遥かに有利な条件の下で商店街も栄えたが地域には限度がある。次第に山手の地区へ視線が向けられていき、殊に芦屋の伸展は、阪急電車開通と共に目覚ましいものがあった。

従つて深江も一時衰退の時代があつたが、阪神大震災のあと急激に伸展の状況が現れてきた。神戸の中心復興が思うに任せず、更に山手の開発が一応の限界となり、そのために臨海の埋立てが進展し、今後引続いて活動しようとする力が自然この地に向かってきた。個人の住居需要は勿論のこと、企業の発展基盤の対象にも欠かせない地区になつてきた。

深江の伸展を念願しながら筆を描く。

平成十年二月二十四日

岡田茂義記

◇この連載は単行本となり史料館で無料配布しています。